光信公ゆかりの地紀行10

エピローグ　鰺ヶ沢町と津軽家

光信公
津軽藩始祖
入部530年

延徳３年（１４９１）３月１日、津軽藩始祖・大浦光信公は、岩手県久慈から鰺ヶ沢町種里へ入部しました。昨年、光信公入部から５３０年目を迎えて始まったゆかりの地紀行も、令和３年（２０２１）３月１日、つまり５３０周年をもって完結となります。

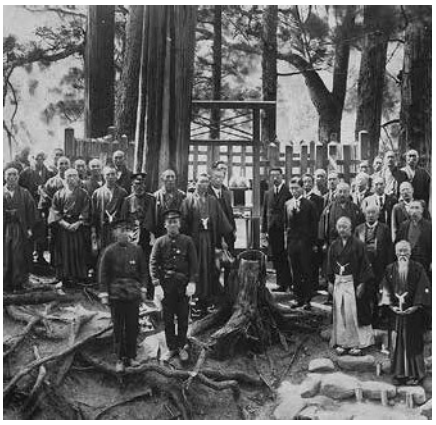
最終回に訪れるのは鰺ヶ沢町。地域の人々と津軽家との交流の歩みを振り返りながら、現代につながる「生きた歴史」にスポットを当てます。

■光信公御廟所～津軽家の聖地～

大永６年（１５２６）10月８日に死去した光信は、遺言によって種里城内に葬られました。光信の墓は現在も城跡の一角にあり、「御廟所（ごびょうしょ）」と呼ばれています。天を突くような杉や松の巨木に守られ、柵で囲まれたその場所は、厳かな静寂に包まれた神秘的な空間です。伝説では「不思議なことに御廟所には一本の雑草も生えない」とも言われています。

◆津軽家との主な交流の歩み（明治時代～現在）

明治18年(1885)	７月	12代承昭様、東京移住後、初めての種里参拝。
明治39年(1906)	９月	13代英麿様、藩祖為信300年祭に際し種里参拝。
昭和６年(1931)	５月	14代義孝様、新婚後に来県し種里参拝。
昭和39年(1964)	８月	華子様ご婚約報告のためご両親と種里参拝。
昭和51年(1976)	10月	光信公没450年祭記念「津軽藩発祥之地」碑建立。 義孝様ご夫妻参列。
平成２年(1990)	10月	光信公入部500年祭（武者行列・銅像建立）。 義孝様ご夫妻参列（義孝様、生前最後の来訪）。
平成７年(1995)	10月	15代晋様、当主となり初めて種里参拝。
令和２年(2020)	10月	津軽家他により御廟所柵再建。 光信公入部530年記念「歴史文化で結ぶ交流宣言」。



江戸時代から続く御廟所の清掃　津軽義孝様の御廟所参拝（昭和６年５月）

光信を先祖とする津軽家にとって、御廟所は大切な「聖地」であり、江戸時代の歴代藩主により手厚く保護されてきました。また藩の日記には、毎年７月７日、種里村の村人が御廟所に集まって草刈りをしていたことも記されています。この草刈りは、実は現在も受け継がれており、種里八幡宮の例大祭（７月８日）の前日に、毎年恒例の清掃活動として続けられています。

昼食会場となった高沢寺を訪れる津軽華子様（昭和39年８月）

■現代にもつながって

明治時代以降、廃藩置県によって、津軽家は弘前を離れ東京在住となりますが、光信公御廟所への参拝は続けられます。歴代当主の方々は欠かさず種里の地を訪れ、郷土の人々との親交を育んできました。

昭和39年（１９６４）８月には、常陸宮妃となる津軽華子様（14代義孝（よしたか）様の四女）がご婚約の報告のために御廟所を参拝。沿道には多くの町民が詰めかけ、子どもたちも小旗を振って華子様をお迎えしたものです。現在は15代当主・晋（しん）様が御廟所参拝を続けられ、さらに10月８日の光信公命日には、津軽家をはじめ町内外の関係者による「慰霊祭」が毎年行われています。

種里の地に眠る光信公の魂は、今も津軽家や地域の人々の手によって守られながら、数百年にわたる歴史の絆をつなぎとめているのです。

津軽晋様（中央）を光信公の館にお迎えして（平成16年5月）

■令和時代と光信公

昨年10月７日、光信公入部５３０年を記念し、光信公ゆかりの秋田県横手市・岩手県久慈市・鰺ヶ沢町・弘前市・黒石市が共に交流の輪を広げていくことを高らかに宣言しました。

４年後、令和７年（２０２５）には光信公没５００年祭という歴史的節目も訪れます。光信公の物語に、今また新たな時代の息吹が吹きこまれようとしているのです。（町学芸員　中田）